《宇和島駅》1997年 Photo：早田浩紀／愛媛県美術館、2023年

「大竹伸朗展」開催記念

大竹 伸朗 特別インタビュー

既にそこにあるもの

宇和島市を活動拠点に、ドクメンタとヴェネチア・ビエンナーレの二大国際展をはじめ国内外数多くの展示会に参加するなど、現代日本を代表するアーティスト 大竹 伸朗 さん。東京国立近代美術館で立ち上がった16年ぶりの大回顧展「大竹伸朗展」が、いよいよ地元・愛媛県美術館で開催されます。

これを記念して、地元開催への思いや宇和島の今とこれからについて、大竹文庫でインタビューを行いました。

宇和島の人にとってお披露目の機会

いよいよ地元での開催となる「大竹伸朗展」について

経歴では1988年から宇和島に来たとなっているけど、その前から遊びに来たりしていたから、宇和島との関係はかれこれ40年近くになる。人生の半分以上ですね。これまで、近くで今回のような規模で展示を行うことが無かったから、特に宇和島の人にとってはお披露目の機会になる。東京での開催とは違う思いがあります。仕事柄地元の人と関わることもないし、自分のやっていることが伝わらない期間が長かったから、今回はすごく楽しみですね。ぜひたくさんの人に見てもらいたいです。

宇和島を拠点にしているのははどうしてですか？

1988年に東京の展覧会が決まっていて、宇和島の造船所でもらった木船で立体作品を作ることを決めていたんです。それでしばらくは、東京で絵を描いて宇和島で創作しての往復だったんですけど、東京の作業場が手狭になってきて契約も切れるタイミングだったから、作品や材料などをとりあえず宇和島に送ろうと。そのときは宇和島に拠点を移そうとは考えてなかったです。3年くらいはいるのかな程度。そのうち娘が生まれて、ずっといるようになった。自分の仕事は周りとのつながりが無いし、とりあえず広い場所をというのが最も重要だったので宇和島は最適でした。それからは、宇和島でしかできないことをやろうと切り替えていったので、作品が大きくなっていった。宇和島は家族がいて、創作する場所ですね。

自分にとって、場所はあまり関係ないんです。その場所を面白がるかどうかなんで、宇和島の面白いところを探していくしかない。他の人にとってはただのゴミでも自分にとっては画材になり得る。都会にしかないものが無いとダメな人もいるだろうけど、自分にとってはそういうことは最重要ではない。ものを作ってなんぼなんで、作品を作れるところが一番重要なんです。作品が作れればどこでもいい。

会場の屋根に取り付けられた「宇和島駅」について

90年代に宇和島駅が改築になるときに、保管されるものだと思ってたら捨てちゃうっていうんで、譲ってもらったんです。屋根に上って自分で一文字ずつ外して。地名って想像以上に人に影響を与えていると思うから、このサインは絶対に捨てちゃダメだって思いました。普段は当たり前のものだけど、無くなって初めて大事さに気づくっていうか、身の回りにあるうちは分からない。それは誰でもそうだと思う。それで自分でネオン管を入れて、作品として新潟、大阪、水戸、広島、福岡、丸亀といろいろな場所で展示してきました。近美（東京国立近代美術館）にも設置したんですけど、近美は1969年に建てられた昭和建築の代表作のようなもので、その昭和の建築と宇和島駅がこれまでの中でベストマッチだと感じたんです。今回近美にこれを取り付けるために今まで宇和島で過ごして来たのかなと思えるくらいに。宇和島駅が自分の家族のように見えた。冗談だけど、美術館の中が空っぽでもいいんじゃないかと思うくらい、今回の展覧会で自分がやりたいことのすべてを言い得ているなと、はっきり意識しました。あれこそ「既にそこにあるもの」っていうか。

《宇和島駅》1997年 Photo：岡野圭
（※写真は東京国立近代美術館開催時）

宇和島のいい部分を見極めてほしい

宇和島の良さ、面白さとは

どこでもそうだけど、地元の人は当たり前過ぎて気付かないんですよね。よそ者が入ってきて何か見つけて動き出して、それを地元の人が面白がったりすると展開していくっていうことが多いんじゃないかな。特に若い子なんかがそういうのに気づいて可能性を感じて始まっていくっていうか。自分が来たころはそういう状況ではなかった。娘の世代がUターンやIターンで戻ってきて面白いことを始め出してる。結局そこにいる人が面白くならないと面白くならないんですよ。どこでもゆるキャラやB級グルメとかにいきがちだけど、ああいうのはダメなんじゃないかな。人が集まるっていうことは、面白い人の気配を感じたいんだと思うんです。そういう価値観を作るのは時間がかかりますよね。すぐ結果を出そうとして安直なアイデアを繰り返すのは悪循環。とりあえず10年は文句を言わないっていう体制が必要だと思います。何人来ているとかばかり気にしていると続かない。

宇和島も人口がどんどん減っています。

やばいですよね。この数年でガラガラ重要な場所が無くなっちゃってる。モダンなショッピングモールができればいいってもんじゃないんですよ。宇和島駅のサインじゃないけど、何が大事なのかを見極める人がいないと難しいですよね。新しくする部分と、古い部分のここは無くしちゃいけないっていうのを見極めて開発していかないと、せっかく無意識に積み上がってきたいいものも、感知しない人が判断するとみんな消えちゃう。宇和島に来た時にいい建物だなと思ったものを、バシバシ壊しちゃうもんね。せっかく宝があるのに捨てちゃう、そういうのは地方都市の残念なところだと思います。しかも加速していっている。そこにいる人たちが気づかない限り止めようがないですよね。自分なんかが言っても何の力もないし、まだ宇和島に残っているいい部分を生かしていくっていう動きをしないと。難しいのは、アートっていうのはあまり必要と思わ

れないものだから、どうしてもほかの部分に目が行ってしまう。それも分かるんだけど、それプラスそういったアート的なものがないと悪循環ですよね。10年後はどうなってんのかなと思います。加速度が心配。

最近で面白かったエピソードはありますか？

最近、長崎県雲仙市にトークで呼ばれたんですけど、主催者は農家と組んで直売所をやっているような人で、何で自分が呼ばれるんだろうと思ったけど、雲仙は好きだから興味本位で行ったんです。その主催者は50歳くらいで東京出身なんですけど、家族で移住して、地元の若い人たちといろんなことやってるんですよ。最初はそれを面白いと思わない人もいたみたいだけど、一軒一軒会いに行って自分たちがやりたいことを一生懸命話すと興味持ってくれて、少しずつ一緒にやってくれてる。新しいことやってますってグループで独立するんじゃなくて、地元とつながるっていう方向性を探っているのがすごい。気持ちがあるっていうか、一生懸命なんですよね。いい感じに地域をひっかき回してて、そこに興味を持った人がいろんなところから集まってる。呼ばれたトークも絵とか農業のことじゃなくて生き方みたいなものに興味を持って話す感じで、美術館で美術の話をするより面白かったんですよ。心が通い合うっていうか、絆ができたような、また行ってみたいなって思えた。若い子たちがいっぱいいて、ここがいかにいいところかっていうのを案内してくれて、野菜が有名だから振る舞ってくれたり、いわゆるもてなしっていうのが心に染みましたね。夜もみんな帰んなくて、畳の上で車座で語り合うみたいな。自分はそういうの苦手なんだけど、いつまでも帰らないんですよ。質問いいですかとかって。ああいう熱っていうか、面白い人が集まる場所に自然とならないと、なかなか活性化は難しいんだと思います。ある意味自然発生的なものじゃないと。

やっぱり若い世代にかかっている

これからの宇和島について

やっぱり若い世代にかかってる。娘たちも面白いことやってる若い子たちとつながってて、宇和島も変わったなって娘を通して感じましたね。やっぱり面白いことやりたい子っているんですよ。そういう中でつながって何かやったりしてるし、ああいうのがちょっとずつでも広がるといいですよね。商店街も空いてるとこがいっぱいあるじゃないですか。なんであいうところで回転していかないのかなって思いますよね。若い子たちが宇和島で何かするとしたら、あんなに立派な商店街があるんだから、あそこを利用するしかないんじゃないかな。やっぱり宇和島は商店街がカギなんだと思います。全国的に見てもあんなに大きい商店街はなかなか無い。まずは1軒とかから始めて、広く公募したりするとやるべきことが薄まっちゃうからターゲットを絞り込んでやってみるとか。

直島（香川県直島町）の家プロジェクト（空き家などを改修し作品化するプロジェクト。大竹さんの作品「はいしゃ」がある）なんかは20数年前から始まったんだけど、最初はすごく馬鹿にされていたんですよ。あんなの人来ないでしょとか、地元からの冷ややかな目もあった。今でこそアートの島となっているけど、火が付くまではすごく大変で時間がかかっています。空き家問題は全国的にも多くて、安直な発想で空き家をアートにみたいな依頼がたくさんあったりもするけど、簡単に考えすぎてる。かけるところはかけないと、やっぱりアートの専門家が入らないと難しいと思いますね。あとは作るのも大変だけど、作ってからも大変。そこまで視野に入れて考える必要があると思います。

いよいよ開催「大竹伸朗展」

5月3日(水)(祝)～7月2日(日) @愛媛県美術館

《残景 0》2022年 Photo：岡野圭

本展は、高度成長期の東京に生まれ育ち、1988年以降は愛媛県宇和島市を拠点に制作する大竹伸朗の軌跡を7つのテーマ――「自／他」「記憶」「時間」「移行」「夢／網膜」「層」「音」――に基づいて読み解く回顧展です。

大竹伸朗（1955－）は、分野を限定することなく多彩に活動を展開し、二大国際展であるドクメンタ（2012年）とヴェネチア・ビエンナーレ（2013年）に参加するなど、現代日本を代表するアーティストとして海外でも高く評価されています。消費され、忘却されてゆくようなあらゆる「もの」に着目し、半世紀近くにわたり独創性に溢れる作品を手掛けてきました。その膨大な数の作品の中には《ニューシャネル》や《宇和島駅》を始め、宇和島ゆかりの作品も数多くみられます。

今回、ライフワークである70冊を超える《スクラップブック》や記念碑的な立体大型作品を含む、選び抜かれたおよそ500点にも及ぶ作品を、敢えて時系列から切り離しその作品世界に没入できるよう再構築してご紹介します。大竹伸朗が、その半生をかけて見つめてきた情景を、作品を通して追体験していただければ幸いです。

開館25周年を迎える愛媛県美術館を会場に、初の地元開催となる本展では、宇和島市、そして道後温泉本館（松山市）と連携した特別展示も実施します。

【作家プロフィール】

大竹伸朗 Shinro Ohtake

©Shinro Ohtake, photo by Shoko

1955年東京都生まれ。愛媛県宇和島市在住 。主な個展に熊本市現代美術館／水戸芸術館現代美術ギャラリー(2019)、パラソルユニット現代美術財団(2014) 、高松市美術館(2013)、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(2013)、アートソンジェセンター(2012)、広島市現代美術館／福岡市美術館(2007)、東京都現代美術館(2006)など。また国立国際美術館(2018)、ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート(2016)、バービカン・センター(2016)などの企画展に出展。ハワイ・トリエンナーレ(2022)、アジア・パシフィック・トリエンナーレ(2018)、横浜トリエンナーレ(2014)、ヴェネチア・ビエンナーレ(2013)、ドクメンタ(2012)、光州ビエンナーレ(2010)、瀬戸内国際芸術祭(2010、13、16、19、22)など多数の国際展に参加。また「アゲインスト・ネイチャー」(1989)、「キャビネット・オブ・サインズ」(1991)など歴史的に重要な展覧会にも多く参加している。

《憶景 14》2018年

《モンシェリー：スクラップ小屋としての自画像》2012年 Commissioned by dOCUMENTA(13) Photo：山本真人

《ダブ平＆ニューシャネル》1999年 公益財団法人 福武財団

《時憶／フィードバック》
2015年

《ミスター・ピーナッツ》
1978-81年 個人蔵

《ひねもす叫び 新宿／新潟／熊本》1999年

《ニューシャネル》1998年

《4つのチャンス》1984年

《Wallpaper》1978–79年

《芥子／音影 II》2008年
愛媛県美術館

《スクラップブック #71／宇和島》
2018–21年 Photo：岡野圭

初公開

大竹伸朗が手掛けた「パフィオうわじま」ホール緞帳と、
道後温泉本館保存修理後期工事の素屋根テント膜作品の原画を特別展示します。

テント膜作品の設置期間は2023年10月31日㈫（予定）までに変更となりました。詳細は未来へつなぐ道後まちづくり実行委員会事務局（松山市道後温泉事務所内）☎089-921-6464までお問い合わせください。

《のぞき岩》（「パフィオうわじま」ホール緞帳作品）2019年

《熱景／ NETSU-KEI》（道後温泉本館素屋根テント膜作品）2021年
© Shinro Ohtake / dogo2021

大竹文庫で配布しているブックリスト(期間中限定スタンプ入り)を持参すると、入場料が割引になります。

表紙絵が変わりました

大竹文庫

2020年８月にパフィオうわじま内にオープンした、大竹さんの寄託蔵書を閲覧・貸出できるコーナーです。